

科学と社会の狭間で：一報道記者として思うこと

濱田哲郎¹⁾

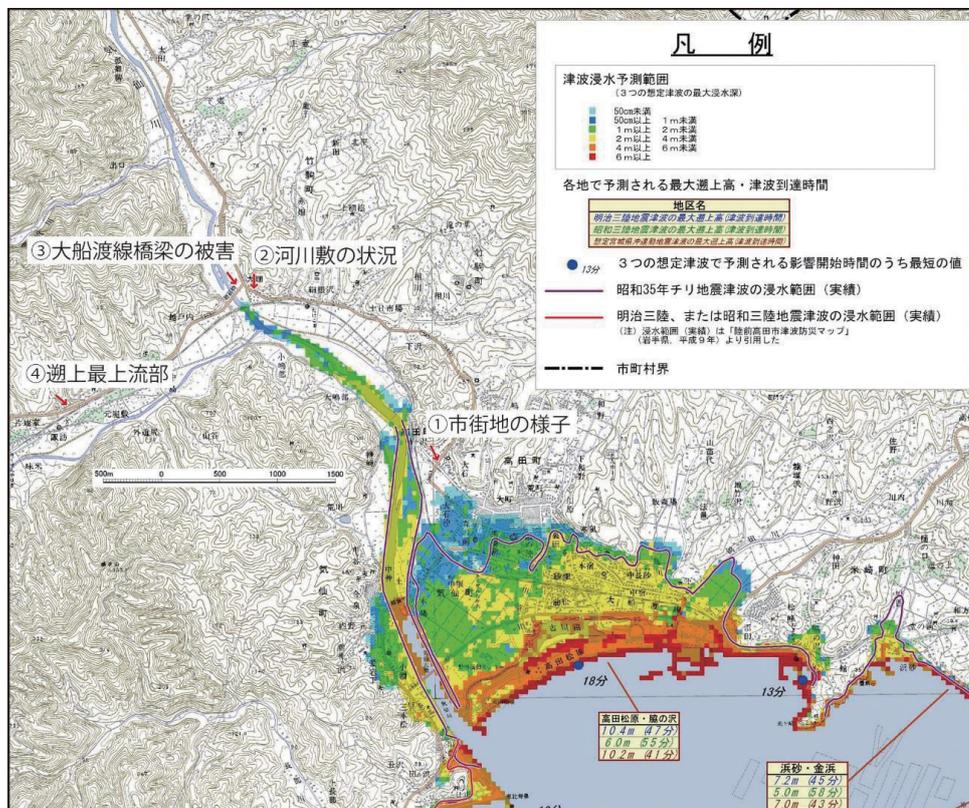
私はこの4月から、町内会の自主防災組織に加わった。地質に関する国立研究所の機関紙に「町内会」とはどういうことだろうと、違和感を持つ方もいるかもしれないが、問題を提起したくてペンを取った次第である。

私は日本放送協会(NHK)の記者として、大半の期間を報道・放送の現場で過ごしてきた。社会部記者時代の取材テーマは環境と医療、そして災害であった。とりわけ災害は、NHK生活最後の部署の放送文化研究所でも、研究テーマの一つに決めた。

私は誕生日のプレゼントに何がいかと問われ「鉱物標本」と答えるなど、小学生の頃から理科、とりわけ地学が好きであった。記者として最初の地学デビューは、気象台による北海道駒ヶ岳の噴火口調査への同行で、地球の鼓動を足下を感じる体験であった。しかし、記者の地学関係の取材というと、学術分野よりも地震、噴火、気象といった

災害のほうがはるかに多い。主なものでも、地震としては日本海中部地震、北海道南西沖地震、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災など、火山の噴火は、十勝岳、有珠山、三宅島などである。これらのうち、東日本大震災は、地震被害と放送の関係について、放送文化研究所の研究者としての視点で検証することができたが、従来の災害報道に対する私の考え方を根底から覆した。

東日本大震災から1ヵ月半が経った2011年4月27日、京都大学防災研究所の調査チームに同行して現地入りした(第1図)。一関からタクシーで陸前高田を目指したが、いくつかの峠を越えて1時間ほど走ったのち、運転手さんが車を止めて言った。「ここが、津波が遡った最上流部です」と。そこは、山に囲まれた地域(第2図の4)であった。道路わきの大船渡線の線路に上がると、津波の被害に遭った家屋や流されてきた様々な“もの”が、まだそのま



第1図 岩手県津波浸水予測地図(岩手県, 2004)と第2図に示す写真撮影地点。

1) 株式会社 NHK グローバルメディアサービス デジタルニュース部

キーワード：地学、自然災害、防災教育、報道、マスメディア

まだった。そこは陸前高田市^{やはぎちやう}矢作町^{けせんがわ}、気仙川に注ぐ支流の左岸で、河口から6キロメートルほど遡ったところである。海の気配すら感じられない。私がここに住んでいたとしたら、大津波警報が出されたとしても避難しようとは露も思わない場所である。

震災の前に岩手県が作成した津波浸水予想図(第1図)によると、川の合流地点でも50センチメートル未満、支流にまで遡ることは予想されていなかった。しかし、実際は、合流点のすぐ上流にある唯一通行が可能だった国道

343号線にかかる廻館橋^{まあたちぼし}まで津波が押し寄せ、大船渡線の鉄橋も橋げたまで流されている(第2図の2および3)。しかし、廻館橋から上流は被害がほとんど無い。その理由は、川を遡った津波によって流されてきた建物の破片などが廻館橋の橋げたに引っかかり、津波をせき止めた状態になったため、津波が支流へとまわったと考えられた。

私は愕然とした。心配されている南海・東南海・東海地震が起き、大津波が発生したら、こうした地域の住民に避難してもらうためにはどのような放送をすればよいのか、



第2図 東日本大震災の一ヶ月半後の陸前高田の状況。

その答えがとっさには思い浮かばなかったからである。

被害を軽減する方法の一つとして考えられているのが、普段からの啓発と訓練である。それには、地震や津波だけでなく、洪水や土砂崩れ、火山の噴火などの自然現象への基礎的な理解が欠かせない。その理解が十分だといえるであろうか。大地の現象を学ぶのは地学である。しかし、現状はどうであろうか。入試科目に地学がある大学はいくつあるか。多くは無いと思われる。自然現象が人間社会のそばで起きれば災害となる場合がある。自然に恵まれた日本では、自然災害と隣り合わせに生活しているともいえるが、自然現象に対する理解と知識レベルでの災害への備えが十分とは決していえないのが現状ではなかろうか。

そこで考えたことがある。災害と防災を地学の教科の範疇に入れ、災害や防災を学校教育の中で学ぶ機会を増やしてはどうだろうか。小学校から大学までそれぞれのレベルに応じて教えるのである。教育が迅速な避難につながった事例を紹介する。「平常心のバイアス」。ご存知の方も多いと思うが、非常事態に陥っても平常時の延長だと考えたく

なる心理状態のことである。東日本大震災の3ヶ月ほど後、陸前高田市で行った聴き取り調査でもその傾向がうかがえた。避難行動まで時間がかかった方が多かつた中、直ちに行動を起こした人は消防団や自治会活動で災害とその際の行動に深い知識を持っていたのだ。まさに「知識は命を救う」のである。研究者の中には、「地学はサイエンスであり、防災はエンジニアリングだから同一視はできない」とお考えの方もおいでだろう。しかし、国民にとって重要なのは、生命と財産を守ることである。サイエンスとエンジニアリングは、社会にとっていわば車の両輪である。一考を是非お願いしたい。

文献

岩手県(2004)岩手県地震・津波シミュレーション及び被害想定調査に関する報告書(概要版),巻末資料 市町村別津波浸水予測図,15.



濱田哲郎

大阪生まれ。北海道大学水産学部卒業。1981年NHK入局。記者として札幌、北見、京都、報道局社会部で勤務。その後、広島、首都圏放送センター、ラジオセンターでニュースデスク。専門分野は環境、医療、災害。定年前に勤務したNHK放送文化研究所では、より避難行動につながる放送のあり方を陸前高田市をケースとして研究したほか、メディア・リテラシー教育と評価の研究のため立命館大学で1年半にわたり実験授業を実施。現在、株式会社NHKグローバルメディアサービス デジタルニュース部担当部長。Email: hamada-t@tk9.so-net.ne.jp

HAMADA Tetsuro (2016) Intermediate between science and general public from the viewpoint of news media.

(受付:2016年7月4日)